



2021年（令和3年）  
1月号（No. 908）

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に  
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

# 日本山岳会誕生の立役者 岡野金次郎翁の日記が寄贈される

渡邊貞信

1902（明治35）年、念願の槍ヶ岳登頂を果たした小島烏水と岡野金次郎のふたりは、直後、10年前に槍に登っているW・ウェストンの存在を知り、同じ横浜在住の彼のもとを訪ねる。これが日本山岳会創設のきっかけとなった。その立役者のひとり、金次郎翁の35年間にわたる日記の電子版が、先ごろ本会に寄贈された。

## 35年間、ほぼ毎日の記録が

今回寄贈された日記は、大正12（1923）年から金次郎翁が亡くなった昭和33（1958）年までのもので、ほぼ毎日の記録であり、日課である近隣の散歩のかたわら、日々の出来事が丁寧に書き残されている。したためられた日記の中には人間味、家族愛が漂い、一方、自由奔放で悠々自適な生活が感じられる。

生涯歩き続けた山に関しては、若かりし時代は案内人を雇い、槍ヶ岳や穂高岳に登る登山が主体であったが、日本山岳会を離れてからは、ウェストン卿の金言「独りで山に行つてはならぬ」を忠実に守り、麓の宿の番頭さんなどとともに登っていたようである。日常の散歩は平塚近くの高麗山（168m）などを登り、近くを流れ相模湾に注ぐ馬入川（現・相模

## 目次

日本山岳会誕生の立役者	
岡野金次郎翁の日記が寄贈される	1
逆境を乗り越え、改めて登山文化の興隆を	4
静岡支部創立70周年記念式典を挙行	5
地域発「山の日」レポート④群馬支部	6
「第8回小島烏水祭」と山と熱意	7
「第19回ライチョウ会議ぎふ大会」報告	8
連載 島の山旅への誘い①	9
活動報告	12
山行委員会	
支部だより	12
岩手支部／山形支部／茨城支部	
図書紹介	15
新入会員	15
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間  
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

## 太平洋戦争前後の体験

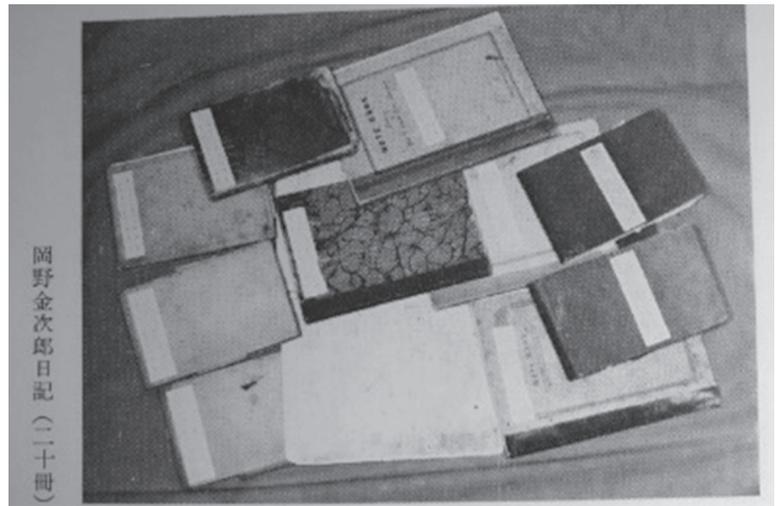
川下流）堤からの眺めを好んだ。戦時中転居した湯河原市吉浜では、毎日の散歩には富士山をはじめ大山、初めて登った思い出の丹沢・尊仏山（現・塔ノ岳）を眺めるのを楽しみとした。

また、時間さえあれば気軽に富士山に出掛け、というよりは通つたというのがふさわしく、うちに生涯112回も登っている。晩年は妻トヨを伴って、ひいきの山小屋の主人を訪ねて歓談を楽しんだ。生涯、山の自然美を愛し続け、日記にはたびたび「悠々自適」「ああ快適、快適」の文字が現われる。

さて、日記には印象に残るいくつかの出来事が書かれているので、概要を紹介してみよう。

## 日記に残る主な出来事

このような状況から金次郎翁は即座に、妻トヨの母方の親戚である小川マツの別荘（湯河原市吉浜）に引越しを決意し、終戦を挟んでのちに平塚市に戻る間、8年間



岡野家に所蔵されている金次郎翁の日記

舞伎の観劇など生活面でのゆとりある生活ができた。このことについての中に金次郎翁は「いい会社に勤めて良かった」としみじみ語っている。

### 盟友、小島烏水の死

昭和23年4月、烏水から『山と溪谷』109号に自身の記事が掲載されたという知らせが来ている。この年の12月、烏水逝去。75歳であった。

金次郎翁は2日後の朝刊で烏水の死を知り、弔意のハガキを出す。

このとき金次郎翁は74歳であった。のちに親戚の望月達夫の依頼もあり、三男満氏に談話を書いてもらい、烏水への追悼文を出した。

を過ごすことになる。  
このとき盟友の小島烏水には転居のハガキを出し、のちに烏水からは慰問のハガキが来ている。  
戦後、恩給の復活でゆとりが  
昭和23(1948)年4月末、33年間勤めたスタンダード石油から、戦争で中断していた業務を再開するのを機に年金を復活する、という知らせが来た。晩年、好きな歌

昭和27(1952)年の大晦日には、今まで歩んで来た人生を振り返って、「青、壮、老年を通じて僕は自然美を愛してきた、悠々自適」「地上の幾多の変遷を楽しんだ、実にこの世に於ける最大幸福者」と述懐している。

また、ウェストン卿との会話の中で、「自然美界を友として悠々自適するので孤独を感じたことが無いと言うたらウェストン卿もそうだそうだと行って互いに笑った」ことを思い出している。

### 日本山岳会の旧友との再会

昭和28(1953)年11月28日、望月達夫を訪問し懇談、急遽その日は泊まることにして、翌29日、望月達夫とともに当時の教育会館別館、日本山岳会に出向き、三田幸夫のマナスル登山の映写会に臨んだ。その席に居合わせた高野鷹蔵、武田久吉、加賀正太郎ら多数の旧友たちの歓迎を受け、賑やかに過ごした。

### 妻トヨを同伴して乗鞍岳登山

晩年、思い出の乗鞍岳にトヨを伴って登山。金次郎翁79歳、トヨ73歳。3028mの山頂よりの眺

望を満喫し、平湯経由で翌日に烏々へ帰る。

帰りのバスに乗り込む際、大変混んで難儀したが、乗鞍岳に初登頂した金次郎翁夫妻と知った登山者たちが、一番前の座席に夫妻を座らせてくれた(晩年、トヨさんは筆者に語った。「とても嬉しかった……」と)。

### 不慮の死

昭和28年、金次郎翁78歳のとき、8年間過ごした吉浜での生活にピリオドを打って平塚に戻った。

昭和33(1958)年2月14日、いつものように八幡社の高台より富士山、大山、丹沢山、天麗山などを展望。

その夜、散歩中の交通事故により、歩き続けてきた84年の生涯に幕を閉じた。

(日本山岳会会員)

## 人生の達人——「金次郎日記」に思う——

岡野 眞

### 真面目さと粘り強さ

このたび祖父・岡野金次郎の日記電子版が日本山岳会に納められ、山岳界はじめ多くの方々に読んで

いただく機会が得られたことに感謝いたします。

金次郎翁の人生は知る人ぞ知るところであり、親族の末席に

連なる小生ですら良く知らないというのが実状です。しかし、少なからず日記や資料を読んでいくと、身びいきを差し引いても、良き人生を過ごした人物として心に残ります。

そもそも日記とは、個人が日々の出来事を記録する文書ですが、その内容は千差万別です。また、古今東西を問わず世界に存在するものとはいえ、金次郎翁が生涯のある時点からその死の当日まで、長期にわたって日記を綴ったきつかけがなんであったのか、大いに関心があります。

おそらく若き日に、土佐丸に乗り組み、「航海日誌」に触れたことや、あるいは登山活動を記録する動機があったのかもしれない。小生の経験からも継続することが難しい日記を、長期にわたって綴ったことに驚くばかりです。この真面目さと粘り強さは、盟友の小島



岡野金次郎翁

鳥水に共通する性格ではないでしょうか。

### 翁は「山恋い」の人

翁は広重の絵を愛し、収集し、芭蕉の俳句を好み、風雅の心をもつて俳句、ときには和歌をたしなみました。もちろん生活の基盤として、良く働き、学び、憩いました。とくに自然美の中に遊び、山を恋したため、みずから山恋い——Mountain Fever——の人と称しています。言い得て妙です。

家庭を大切にし、妻を愛し、子どもを育て、さらに親戚、友人、隣人との交流を大切にしている様子も日記からうかがわれます。往々にして日記には、個人的な悩み、他人への嫉妬、偉い人への付度などが見られるものですが、そうした感情の発露は微塵も見られません。

例えば政治家の日記などは、後世、見られることを前提にしているのですが、翁の日記については当の本人も、こうした形で広く読まれることになろうとは思っていません。だから、彼の人間性が率直に表われていると見て良いでしょう。

### 人生を楽しんだ達人

翁が青年時代を送ったころの社会は、「末は博士か大臣か」という立身出世の価値観が蔓延していたのですが、そうしたなかで名誉欲や出世欲に縁もなく、しかし世俗を嫌うわけでもなく、人生を楽しく生きた姿は、まさに「人生の達人」と表現するしかありません。現在、新型コロナウイルスに襲われている社会にあつて、多くの人々が改めて人生の価値を考え直すとうすとうす、翁の生き方にどこかヒントがあるかも知れません。

これまで秘蔵されていた日記が、なんらかの形で皆様のお役に立てることになれば幸いです。

#### (岡野金次郎翁令孫)

#### 日本山岳会の草創期を物語る歴史的な資料

若き日、ウォルター・ウエストンの存在を知り、友人の小島鳥水とともに面会し、日本山岳会の創設のきっかけをつくり、重要な役割を果たされた岡野金次郎翁の貴重な日記資料を、翁のお孫さん

に当たる岡野眞様から手渡しでご寄贈いただきました。

同時に、翁の親戚縁者に当たる渡邊貞信会員に立ち合っていたのだいたことは、奇しくも得難い場面に巡り会うことができ、会務の役柄としてこれ以上の感謝と喜びはありません。今後は歴史資料として、大いに活用させていただきます。と思っています。

(資料映像委員会委員長 溝口洋三)



金次郎翁の日記電子版の寄贈式。右から2人目が岡野眞氏

## NEW YEAR'S MESSAGE

## 逆境を乗り越え、改めて登山文化の興隆を

会長 古野 淳

令和3年、新春のお慶びを申し上げます。

恵みの雪が数年ぶりに来たというのに手足を縛られているようであつての「日常」が懐かしく思えます。かくも隠遁生活が続くと、多忙を理由に山に行かない時間があつたことを後悔さえします。

1945(昭和20)年、虎ノ門のJAC事務所が瓦礫になつて、紙の入手にも苦労するなか、先輩方は翌年には『山岳』の発行を再開させました(会報「山」135号へ19



上高地から六百山を経て霞沢岳へ向かう筆者(2019年4月6日)

46年6月)「山へ帰ろう―小島烏水―日本山岳会の復興と再生」。戦争の苦難に比べるべきことではありませんが、我々にとつては戦後最大の災難だとも思える今の状況から、登山文化を守つていかなければなりません。

巷ではアニメ『鬼滅の刃』が日本映画史上の記録を塗り替えました。鬼退治の物語ですが、古代より「鬼」は疫病神、天然痘やコレラなど、見えない敵、感染症との戦いに伴う社会不安から生まれた創造物でした。

民俗学の先駆けとも言える菅江真澄は、天明大飢饉の直後、1785(天明5)年に東北を旅して、飢えと疫病で亡くなった屍が積み重ねられた惨状を目の当たりにし、疫病退散を願う風習や、人々が疑心暗鬼になっている状況を記録しています。

1347年、シルクロードを介してヨーロッパに伝わったペスト菌。ヨーロッパの人口の3分の1が失われ、元に戻るまで100年近い

歳月を要しましたが、その後、ルネサンス文化が花開きました。カトリックの影響が弱まるとともに、レオナルド・ダ・ヴィンチやコペルニクスが登場し、革新的芸術と科学の進歩が融合したのです。

昨春の緊急事態宣言の時分に比べれば、コロナ禍への対応について分かつてきたことも多く、私たちが登山を再開するためには、「正しく恐れる」の一言に尽きます。本会にも様々な立場の人から様々なご意見をいただいております。私たちは歴史に学び、科学の力を信じて、全国一律ではない環境を理解し、同調圧力に負けず、自分の判断で登山活動を再開させていきたいと思ひます。アフター・コロナにおいては、多くの人たちに価値観の変化が生まれ、自然回帰の流れが来るのではないかと期待します。

\*

南アルプスにおけるリニア新幹線工事について、静岡支部から理事会宛に要請がありました。赤石山脈は同支部が中心となつて、長年にわたつて宝のように接してきた山々ですが、山腹を貫くトンネル工事が水脈を切り、山岳地帯の植生だけでなく、静岡市民の水資

源を枯渇させる恐れがあるのとこと。同支部としては、工事への懸念を表明してほしいとの趣旨です。

丹那トンネル工事で水脈を切つてしまった事故の二の舞になるのではないかと、個人的に憤る気持ちはありますが、計画は2011年、国策として始まり、すでに後戻りできないところまで工事は進み、推進派と反対派の対立が政治問題化しています。現状、工事は中断しておりますが、本会がどのような関わり方ができるのか難しい問題です。日本の自然保護活動の先駆者であり、本会創立者の一人、武田久吉さんのアドバイスを天国からいただきたいものです。

次に「支部活性化」に関してですが、創立120周年の記念プロジェクトの一つ「全国山岳古道調査」が進行中です。JACが一つに結束して、支部活性化のきっかけになつてくれればと思ひます。古地図と歴史資料を紐解き、いにしえの旅人がどんな気持ちでこれらの路をたどつたのか。想像するだけでわくわくします。

本年もどうぞ、会員の皆様のお力添えをお願いして、ますますの発展を図りたいと思ひます。

## REPORT

## 静岡支部創立70周年記念式典を挙行

静岡支部長 有元利通

大切な記念募金を無駄にせず

令和2年2月26日に支部創立70周年を迎え、記念行事をいくつか計画をしました。創立記念日当日の記念小山行や小祝賀会は実施したものの、4月25日に予定していた記念式典や講演会、祝賀会などは新型コロナウイルスのため、延期せざるを得ませんでした。翌日の記念登山や海外登山は中止しました。

その後もコロナ禍は収まらず、役員も会員も悩みました。会員に感染者はいないので、講演会の後の座談会は中止して、式典と講演会と、会場を移しての祝賀会のみを行なうこととしました。

式典と講演会のみで、祝賀会や飲食をどうするか悩みました。会場のホテルをキャンセルすると、70周年記念で寄付していただいた募金の中から17万円を、キャンセル料としてむぎむぎとドブにうつちやるようなことをして良いのか、折角いただいた大切な募金を、そんなことに使って良いのかという

思いが役員一同に強かったのです。

12月6日(日)午後2時より、記念式典を「毎日江崎ホール」で開催しました。初めに支部長として「本日出席、ご参加いただいた皆さんに感謝いたします。また、4月の予定がコロナの関係で今日まで延期となり、内容なども変更して、ご迷惑をお掛けしましたことをお詫びいたします。しかしながら、曲がりなりにも本日、式典が挙行できましたことを、ともにお祝いしたいと思います。」と挨拶しました。

本部から古野会長が、また県内の山岳3団体からもご来賓が駆け付けてくださり、それぞれお祝辞をいただきました。歴史好きの古野会長からは、オルコック一行による古い富士登山の話などを披露しながらの挨拶でした。東海支部長からの祝電披露もありました。続いて、高額寄付者に対して支部長より感謝状を贈呈しました。

式典終了後、引き続き山本良三JAC評議員の「山の文化とヒマラヤ登山の軌跡」と題した講演を、

一般の方も若干入れて開催しました。

祝賀会も感染対策を徹底

式典・講演会を無事に終えたのち、会場を静岡駅南「ホテルグランヒルズ静岡(旧センチュリーホテル静岡)」に移して、5時から祝賀会を開催しました。コロナ感染を心配されて祝賀会のみをキャンセルされた方も大分ありましたが、やむを得ないと思います。

祝賀会は木村事務局長の司会進行で進みました。支部長、来賓の挨拶、東海支部長からのお酒の差し入れの披露と続きました。そ



記念式典後に行なわれた山本良三評議員の講演



祝賀会終了後、参加者一同で記念写真に収まる

の後は長島吉治会員の乾杯の音頭で宴が始まりました。テーブルは3密を避けるために一人一人アクリル板で仕切っており、大声を出さずに、お互いお酌はせずに、ホテルのウエーター、ウエートレスに注いでもらって宴は進みました。その後、司会者の指名により参加者一人一人が演壇に立つてひと言ふた言、自己紹介を兼ねて挨拶を述べました。

中締めの後、参加者一同の記念写真を撮影して無事に祝賀会を閉じました。曲がりなりにも記念事業を終えて支部員一同、ほっとしたことでした。

# 地域発「山の日」レポート④群馬支部 県内山岳3団体が結束して「山の日」を 盛り上げ

## 街で、「山の日」PR

群馬支部では山の日関連のイベントとして、「ぐんま山フェスタ」と「山の日イベント in 谷川岳」に主催団体の一つとして積極的に関わっている。昨年はコロナ禍で両イベントとも中止を余儀なくされたが、本年以降、より充実した内容で再開できることを願っている。

「ぐんま山フェスタ」は「山の日」が制定された2014年の8月、地元紙の上毛新聞社などが実行委員会を組織して、県内の登山・ハイキング情報を発信する場として前橋市の群馬県庁1階の県民ホールで始まった（以来、同会場で開催）。13年に創立したばかりの群馬支部では、日本山岳会と山の魅力をアピールする事業を模索していたが、翌15年から群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟とともに後援という形で参画することになった。この年は本部の特別事業補助金も得て、群馬の山の写真展示やパネル・ディスカッション「群馬

群馬支部事務局長 根井康雄

の山を語る」などを行なった。

16年から3団体は共催に加わり、群馬支部では「マナスル60年」を記念して、記録映画上映と同峰に2度遠征している田中壯佑支部長（当時）による講演会を開いた。また、日本山岳写真協会会長で群馬支部の橋本勝会員による写真展示なども行なった。

## 山岳3団体で連絡協議会設立

さらに、この年以來、木暮理太郎（日本山岳会第3代会長）の資料展示を、地元で顕彰活動を続ける「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の協力を得て行なっている。また、同年4月には八木原啓明・日山協会長の肝いりで「群馬県山岳団体連絡協議会」が日本山岳会群馬支部、群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟の県内山岳3団体によって設立され、名実ともに群馬県の山岳団体が結集して山フェスタの中核を担う態勢が整った。山フェスタはその後も来場者数は



会員によるパネル・ディスカッション(山フェスタ2015)

増え続け、19年には2日間の開催で7000人が訪れるまでに育ってきただけに、20年のコロナ禍で中止には無念の思いが募る。

一方、「山の日イベント in 谷川岳」は同じく2014年8月、「山の日」制定を機に谷川岳を擁するみなかみ町で、「山の日」のプレイベントとして始まった。15年のプレイベントでは一ノ倉沢での登攀や講演会などもメニューに盛り込み、また、1泊の縦走コースが組み込まれた年もあったが、現在は8月の「山の日」に日帰りの登山、ハイキング・ツアーを行なっている。16年以來、群馬県山岳団体連絡協議会と地元みなかみ町の



「山の日イベント」でのツアー出発式(2018年8月11日)

谷川岳エコツーリズム推進協議会の主催で、日本山岳会群馬支部では一ノ倉沢、幽ノ沢出合を経て芝倉沢出合の虹芝寮までのコースで自然観察を行なってきた。虹芝寮で飲む天然水で淹れたコーヒート豊富な地元スイーツも人気で、緑のインタープリターや地質の専門家など、支部の人材も活かした谷川岳の地形や地質の現地学習、山麓の自然観察とともに好評を博している。

## 自然観察会や峠越えツアーも好評

そのほか、谷川岳への登頂ツアーや、清水峠越えの弾丸ツアーなども人気で、各団体からスタッフ

を出し、安全をモットーに山を楽しんでもらっている。毎年、ツアー参加者は100人ほどだが、ポイント・ラリーの参加者も含めると500人近くが集う。また、上野駅からJRの「山の日谷川岳号」も運行され、この日の谷川岳はいつも以上にぎわいとなる。

18年は、「ぐんま県境稜線トレイル」の開通に合わせての盛大な開催が予定されたが、前日にトレイル巡視中の防災ヘリが墜落する惨事が発生。稜線トレイル関係のセレモニーは中止となり、この年の「山の日」は、けっして忘れられない日となった。

「山の日イベント」も、2020年はコロナ禍で中止を余儀なくされた。「山フェスタ」とともに年々盛況を続けてきただけに残念でならない。両イベントの継続には、コロナ禍終息を願うとともに、「ウイズ・コロナ」の時代のイベントのあり方も考えながら、新たな運営方法を見出しつかなければならない。実に重い課題だが、山岳団体がまとまり、自治体や地元および関係諸団体も含めた結束と協力体制をより広く構築して、乗り越えていきたい。

## REPORT

## 「第8回小島烏水祭」と山と熱意

四国支部長 尾野益大

第8回小島烏水祭(本部主催)が2020年11月14日、香川県高松市の峰山公園で開かれた。主管する四国支部の会員21人が参加。顕彰碑を拭き周辺を掃き清め、古野淳2代会長、尾上昇3代会長、烏水のお孫さんで四国支部会員・相良泰子さんの祝辞を紹介した。今年の烏水祭は異例。通常4月



烏水顕彰碑前で行なわれた参加者一同の記念撮影

に開くが、コロナ禍で延期していた。中止も考えたが「ささやかでも続けよう」との会員の気持ちが強くと、開催に踏み切った。普段は顔を合わさない仲間だが、やはり直接会おうとすぐに打ち解け、笑みがこぼれる。パソコン画面上では絶対に味わえない。幸い感染者は今も出ていない。

古野会長、尾上元会長のメッセージどおり、熱意や継続の尊さを改めて感じた。烏水が生きた時代も現代も、山を知った者はあるとき、人が自然の一員であると自覚し、言葉ではなく感性と肌で社会を理解したことに気付かされる。筆舌に尽くしがたい、豊かな心も養われる。烏水祭は、烏水という人を通してそれを再確認できる絶好の機会で、絶やしてはいいないと思う。

解散後、有志が市内のホテルで昼食。昨夏の沢渡

からの霞沢廻行、野澤誠司副会長との束の間の交流の思い出話を持ち上がった。霞沢の廻行は烏水が日本人登山家として槍ヶ岳に初登頂した行程内容の一部で、今夏、四国支部会員が烏水の軌跡を追うための偵察だった。

四国支部は規約どおり、烏水顕彰が目的の一つ。烏水祭をはじめ、烏水のご親族の入会と交流が実現し、烏水が米国滞在時に頂上近くまで登ったシャスタ山登山を実施。霞沢から槍ヶ岳へもその一環だ。

計画は、烏水や播隆上人が残した文献を調べ、烏水の足跡を現地で追った近藤信行、山崎安治、節田重節各氏ら先人の資料を参考に登山ルートを推定。夏にコロナが収まっていれば「沢渡→霞沢→カミウチクボ沢→稜線→白沢→横尾→赤沢岩小屋→槍ヶ岳→白出口」の予定で実施したいと考えている。早くも第8回烏水祭が終わり、時の早さを感じる。尾上元会長、神崎忠男、重廣恒夫西元副会長の支援がなければ、烏水との出会い、支部設立は実らなかつた。コロナ禍で会員の志気は低下ぎみだが、登山同様、危機管理を徹底し、初心を忘れず活動したい。

## REPORT

## 「第19回ライチョウ会議ぎふ大会」報告

自然保護委員会委員長 谷内剛

昨年11月7日(土)と8日(日)の2日

間にわたり、岐阜大学を会場に開催された「第19回ライチョウ会議ぎふ大会」に参加しましたので報告します。当日は講演要旨集とともに、一般社団法人日本アルプスガイドセンターと環境省によって発行された『ライチョウ観察ルールハンドブック』が配布されました。(https://thejapanalps.com/parmigian)から閲覧可能です。

## 基調講演は中村浩志氏

7日の基調講演は、大会長である中村浩志氏の「ライチョウの生態と未来」で、ライチョウの生態と減少の実態やその要因、現在取り組んでいる活動など、一般参加者にも分かりやすい講演だった。



『観察ルールハンドブック』書影

日本のライチョウについて

ニホンライチョウは、北極圏を取り巻く地域に分布するほかのライチョウとは完全に隔離されて世界の最南端に分布し、日本国内では本州中部の高山帯に生息する特殊な集団で、現在、国の天然記念物、絶滅危惧種IB類に指定されている。1985(昭和60)年に、約3000羽が生息していることが明らかにされたが、最近の調査では、様々な要因により1700羽ほどに減少していることが判明した。特に南アルプス・白峰三山北部での減少が顕著である。また、雛が母親の「盲腸糞」を食べることで、高山植物の消化を助けるための消化細菌や免疫を獲得していることが分かっており、これが動物園などでの飼育や野外へ放鳥する際に大きな役割を果たしている。

## 様々な課題について

ライチョウ減少の主な要因としてはニホンザル、ニホンジカ、イノシシなどの食害による高山環境の破壊、キツネ、テン、カラス、チ



「ライチョウの生態と未来」と題して講演した中村浩志氏

ョウゲンボウなどによるライチョウの卵、雛、親鳥の捕食、気候温暖化の影響によるイネ科植物の生息域への侵入などがある。

## 保護活動について

環境省が中心となつて、生息地でのケージ保護やキツネやテンなど捕食者への対策、気候温暖化の影響を強く受けている、火打山でのイネ科植物の試験的除去を行なってきた。

\*

8日は3部構成(全11題)で、専門的な研究発表が行なわれた。第1部「ライチョウの生息地での取り組み」は、南アルプスおよび中央アルプスにおけるケージ保護の実

際、火打山におけるライチョウの生息の現状と対策など。

第2部「動物園でのライチョウ生息域外保全の取り組み」は、国内6園館での生息域外保全(人工孵化、育雛)の取り組みと、現在の課題や対応。

第3部「ライチョウの野生復帰にむけた研究の取り組み」は、ライチョウの腸内環境について、ライチョウが野生復帰するために必要となつてくる高山植物食に適した「野生型腸内細菌」の移植や腸内細菌誘導のための飼料開発、ニホンライチョウに高率で感染している寄生虫に対するワクチン開発。

\*

各地で活動しているライチョウサポーター(パートナー)制度に参加することは、ライチョウ保護にとつて非常に大きな助けとなるのはもちろんですが、日ごろの登山活動でも捕食者を増やさないう、食べ残しなどを放置しない(させない)、気候温暖化について考えながら日々の生活を見直す、また、ライチョウが置かれている状況について学び、伝えるなど、身近なところからできることを気付かせてもらえる機会となりました。

連載■島の山旅への誘い①

## 小笠原諸島

— 母島・乳房山、石門トレッキング／父島・躑躅山、中央山など

### 小笠原諸島の概説

日本国内の「島の山旅」としては、北の利尻島・利尻山と、南は屋久島・宮之浦岳をまずは連想する方が多いと思う。では、いちばん遠い島の山旅としては、どこを連想するだろうか。東京から南へ1000kmも離れた、太平洋上に浮かぶ30余りの島々の総称となる小笠原諸島ということになる。

小笠原諸島では生き物たちが独



固有種のマルハチ。丸に逆さ八の字が幹に

自の進化を遂げた結果、固有の生き物たちや、それらが織りなす独特の生態系が生物の進化を表わす見本として価値があることを認められ、2011年6月、ユネスコの世界自然遺産に登録された。

### 梶山太郎 すぎやま

この島々は今まで一度も大陸と陸続きになつたことがない海洋島のため、海流、風、鳥などによって運ばれてきた動植物は、独自の進化を遂げてきている。ここでは、原生状態を保つ亜熱帯性の山や森の中を、固有の動植物や鳥をウォッチングしながらの登山やハイキングが大きな魅力となっている。また、海抜を意識することができ、登山の面白さや、コース上からの展望も楽しみの一つである。

なお、小笠原諸島は亜熱帯に位置しており、温暖多湿な海洋性の気候となっている。年間を通して暖かく、夏と冬の気温差が少ない。東京と比べると冬期は父島が12℃、気温が高く差が大きい、夏期は

差が小さくなり、8月はほとんど差がない。ただし、日差しは年中強いので、日焼け止めや水分補給を忘れないようにしたい。

小笠原諸島へアプローチする交通手段としては飛行機の定期便が就航していないため、唯一の公共交通機関となるのが「おがさわら丸(1万1000t)」である。乗船時間が長くなる小笠原諸島への航路は、ゆつたりとした時間の流れを感じる船旅の楽しさを、強く印象付けてくれる。

小笠原海運が運行する「おがさわら丸」は、東京・竹芝橋と父島・二見港間を、曜日は確定しておらず5〜7日間に一度就航している。通常は午前11時に竹芝橋を出港し、丸一日(約24時間)かけて翌日の午前11時に父島・二見港に到着。さらに南へ約50km離れた母島へは「ははじま丸」に乗船して約2時間の船旅となる。小笠原諸島の中で一般の人が住んでいる島は、この父島と母島だけで、両島を合わせた人口は2600人弱である。



母島・乳房山山頂付近から見下ろしたボニンブルーの海

今回は、この母島と父島の代表的な登山やトレッキング・コースについて、それぞれ紹介しよう。

### 登山・トレッキング案内

#### ▲母島・乳房山登山

小笠原諸島における最高峰は南硫黄島(916m)だが、有人島の最高峰は母島の乳房山(463m)である。母島の周囲は約58kmで、ほとんどが急峻な崖が形成されており、乳房山は島のほぼ中央部に位置する。「爆弾の跡」から巨大なガ



リアである。また、現地の認定ガイドの同行が必要となる。塚ヶ岳・石門コース入り口からスタートして、石灰岩の溶食地形が見

られ、希少種も観察しながら自然に近い状態のルートを歩けることが魅力だ(歩行時間:約7時間)。

▲母島・小笠原小富士

都道最南端よりハイキング開始。テープル珊瑚の発達した南崎から、日本最南端の「ふるさと富士」でもある小富士(86m)を訪れる。比較的起伏の少ない、ボンブルーの海を望むハイキング・コースである(歩行時間:約3時間)。

▲父島・躑躅山から千尋岩トレッキング

躑躅山の登山口からハイキングを開始して父島の南端、海拔260mの千尋岩(ハートロック)を目指す。前半は小笠原諸島の固有種が多く自生している躑躅山(299m)の周辺を歩く(躑躅山山頂は

ジユマルの森を抜け、乳房山遊歩道を歩く。母島では湿性高木林が多く、上部ではシマオオタニワタリの中を登って行き、乳房山山頂の展望台からは、ボンブルーの海原が目飛び込んでくる。「ボン」とは小笠原諸島の英語名 Bonin island からきており、小笠原諸島では、濃く深くどこまでも透き通った独特の青色をそう呼んでいる。洋上に浮かぶ小笠原の島々の遠望も満喫した後は稜線に沿って下り、沖港へ下山する(歩行時間:約5時間)。

▲母島・石門トレッキング

石門コースは、母島で特に貴重な固有種と原生林が残されている場所。3〜9月(3月は一部ルートのみ入域可能)に入域できるエ

植生保護区域のため立ち入れない)。母島とは対照的に、父島の自然植生は乾性低木林である。コース途中には、今なおいくつもの太平洋戦争の爪痕が残されている。さらに海を望む千尋岩の岩壁上まで足を延ばそう。海側から千尋岩を見ると、赤い岩肌がハート型に見えることから「ハートロック」と呼ばれており、父島では絶景スポットとなっている。千尋岩から途中まで往路を戻り、八ツ瀬川に沿って小港園地に下山する。動植物も多く見られる森の中を歩き、太平洋を望むすばらしい景色や戦跡など、小笠原の豊かな自然と歴史を感じることもできる、変化に富んだスペシアルなコースである(歩行時間:約6時間)。

▲父島・中央山

父島で一番標高が高い山が中央山(319m)である。島のほぼ中央に位置しており、夜明山道沿いの園地入り口からわずか10分ほどで容易に到着できる。頂上には戦時中に使用していた電波探信儀(リーダー)の台座が残っている。中央山展望台からは、緑豊かな父島や二見港の街並みなど360度の景観が望める。



亜熱帯の森を抜け、母島・南崎から小富士へ

その他観光情報など

小笠原諸島では、登山やトレッキング以外にも様々な楽しみがある。海の楽しみとしてはシュノーケリングやダイビング、フィッシング、シーカヤックなどなど。生き物との出会いは、ホエールウォッチング(2〜4月:ザトウクジラ、5〜11月:マッコウクジラ)、アオウミガメ(6〜7月:産卵期、8〜9月:孵化期)、一年を通じて出会えるイルカ、そして、ナイトツアーでは星空観賞とオガサワラオオコウモリ(天然記念物)など夜行性の生き物の観察もできる。

これら小笠原諸島のかげがえのない自然を守るために、エコツーリ



5日目：午前中、ボートクルーズを楽しみ、午後、おがさわら丸で二見港を出港し、船中で1泊。  
 ◇6日目：午後竹芝橋に帰着。新型コロナウイルス感染拡大防止について

ズムの実践が早くから進められている。特に外来種の侵入を防ぐための取り組みを強化しており、小笠原諸島にいない生き物を持ち込んだり、ほかの島や山中に広げたりしないように、乗船前や入山前には、靴底に泥や種や虫などが着いていないかチェックを行なっている。また、いくつかの登山コースや指定ルートにおいては、許可を受けた現地ガイドの同行が必要とされているため、個人だけでは行けないエリアがある。登山やトレッキングなどが専門のツアー会社や、地元のアウトドア・ショップ、

ガイド会社に問い合わせして参加することを勧めます。  
 ちなみにアルパインツアースの「秘境・小笠原諸島ハイキング6日間」というツアーを、モデルプランとして紹介しておく。  
 ◇1日目：東京・竹芝棧橋をおがさわら丸で出港し、船中で1泊。  
 ◇2日目：昼ごろ父島・二見港に入港。ははじま丸に乗り換えて母島・沖港へ。上陸後、周辺散策。母島泊。  
 ◇3日目：乳房山ハイキング。下山後、ははじま丸で父島へ戻り、父島泊。  
 ◇4日目：躑躅山・千尋岩ハイキング。父島泊。  
 ◇



父島・千尋岩からの展望。クジラが見えることも

は、「おがさわら丸」に乗船されるお客様の健康と安心・安全、そして、小笠原村における感染拡大を未然に防止するため、水際対策が重要である。現在は「おがさわら丸」乗船者に対して唾液採取によるPCR検査を試行している。すべてのPCR検査希望者には、小笠原海運より事前に検査キットが送付され、検体を指定された窓口に、前々日または前日に提出していただくか、事前提出が困難な方は郵送も可能で、詳しくは小笠原海運のホームページ (<http://www.ogasawarahyundai.co.jp>) などで最新情報を確認してもらいたい。



登山口には種子除去装置が置かれている

ながら実現することを目指すところ、旅や登山の醍醐味があるのではなからうか。小笠原諸島は距離や交通状況によって容易に行けない場所、しかも現在はコロナ禍の影響もあるなかで、さらに遠い旅の対象となってしまう。しかし、太古にこれらの島々が形成されてから悠久の時を経て、変化しながらも現在の小笠原諸島の自然が残されており、価値のある貴重な地球の財産となっている。それだけに、機会があればぜひ入島して、歩いて接してほしい島のひとつである。  
 (アルパインツアー日本の山事業部担当)

# 活動報告

## 山行委員会

### 四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち 徳島県

2020年3月(香川県)からの  
お遍路もこの11月、4回目の徳島  
県で最終回となった。コロナ禍で  
4月(愛媛県)は6月下旬に延期に  
なり、35℃の中を汗だくで歩いた  
1番札所から2番、3番と順番に  
回るのを順打ち、逆打ちはその逆。  
逆打ちは順打ちの3倍のご利益が  
あると言われ、閏年に盛んになる。  
衛門三郎は四国遍路の元祖とも  
言われる人物で、こんな話が残り  
ている。

富豪だが強欲非道な衛門三郎の  
屋敷前で、弘法大師が托鉢をした  
ときに、竹帚でその托鉢を叩き割  
った。ところが衛門三郎の8人の  
子どもが次々に死に、この非を悔  
やみ、大師に許しを請うため四国  
遍路に出る。20回順打ちをするが

日本山岳会の  
各委員会、同好会の  
活動報告です。

会えず、それではと21回目は逆に  
回ってみると、焼山寺(12番札所)  
の手前の杖杉庵で倒れたときに大  
師が現われ、許しを請うことがで  
きた。大師は「そなたの悪心は消え  
た。来世の望みは叶う」と言い、三  
郎は「一国の国司に生まれ、善政を  
したい」と告げ亡くなった。  
その後、領主・河野息利の長男  
が「衛門三郎再生」と書かれた石を  
握って生まれ、その寺は石手寺(51  
番札所、道後温泉の近く)と改称  
された。  
こんな話を信じての逆打ちとな  
ったが、順打ちの何倍も難しい。目  
印が極端に少なく迷ってしまう。  
なんとか苦勞しながら全員の協力  
のもと無事回ることができた。  
3回目の10月、高知ではお遍路  
を教えていただいた白濱先達に、  
逆打ちゆえに会うこともできた。  
1周目以来、歩き9周目での再会  
だった。



民宿とくます前での参加メンバーの記念撮影

秋の徳島は吊るし柿でいっぱい。  
コスモスがきれいだ。結願の1番  
霊山寺(鳴門市大麻町坂東)手前  
は、ドイツ村がある。第1次世界

大戦で捕虜になったドイツ兵が収  
容されていた。人権を尊重し、で  
きる限りの自主的な生活を認めた  
ことから、ドイツ兵は地域住民と  
も打ち解けていたそう。日本で  
最初に「交響曲第9番」が演奏され  
た。収容所に植えられていたコス  
モスを、市内中に咲かせるイベン  
トが行なわれていた。  
昨年11月に父が亡くなり、供養  
も兼ねたお遍路だった。お遍路を  
始めたきっかけも父がつくってく  
れた。

「じき父の 笑顔と歩く へん  
ろみち」  
ご参加の皆さん、ありがとうご  
ざいました。(数見直)

## 支部



## だより

全国各地の支部から、  
それぞれの活動状況を、  
北から南へとリポート  
します。

### 岩手支部

「岩手ゼロ」の下、月例山行  
を続ける

2020年、新型コロナウイル  
スの世界的汎流行に振り回される  
中で、岩手県では7月末まで1人  
も感染者が出なかった。「岩手ゼ

「ロ」という新語が、神話のごとく語られ続けたのだった。そのような状況下で例年どおりの4月総会に始まり、今日までほぼ平穩に、岩手支部は計画に沿って月例山行を

## 会員名簿発行の中間報告

会報「山」9月号でお知らせした会員名簿は、掲載希望者が約1800人となり、発行する運びとなりました。今年度中にお手元に届く予定です。会員名簿には郵便振替用紙を同封しますので、お支払いをお願いいたします。

掲載内容は、①会員番号 ②氏名 ③住所 ④所属支部 ⑤会員種別の5項目および資料として定款や支部所在地、図書室の利用方法などになります。

なお、会報でお知らせしましたように、名簿掲載者のうち希望者のみに有料で頒布するものです。掲載していない方、および名簿の購入を希望されていない方には発送されません。ご留意ください。

(総務担当常務理事・永田弘太郎)

実施してきた。

コロナ対策として留意したことといえば、あまり人の行かない山を選び、県境を越えるとしても列車やバスを利用せず、自家用車も乗り合わせを避ける、休憩や食事ときは密集せず、短時間で済ませる、必要に応じてすぐ使えるよう消毒スプレーは個人装備とするなど、状況に合わせて強化した。ただ、12月だけは宿泊ありで忘年会をセットしたが、貸し切りの保養所から感染警戒を理由に断りの申し出があったので、日帰り山行と委員会のみに変更した。

7月1日の岩手山山開きは中止であった。岩手県山岳協会普及部



『風の又三郎』の舞台と言われる猫山での昼食

が管理する岩手山8合目避難小屋は、例年と異なり禁止事項のやたら多いルールの下、協会所属各山岳会により最小限に絞って、夏期100日間のみ小屋管理の運営が続けられた。岩手支部の当番日は9月5〜6日(土・日)である。小屋で使うガソリンや販売物を上げるほか、薪のボッカ競争に加わり、「どうせ担ぐなら面白い方が良い」と発奮。男女8名で総量282kgを上げ、岩手支部は第2位を獲得し、鼻を高くした。

岩手支部が主催する8月10日の山の日記念山行については、例年のような一般公募ではなく、知合いを誘う程度に募集して、花巻市の猫山(920m)に登山した。宮澤賢治の『風の又三郎』は、主人公の父親が山を調べて歩く鉱山師という設定であり、鉱脈のあるこの山の小学校が舞台だとされている。しかも近年、古老の記憶をもとに実際に発見されたというモリブデン坑跡が話題となり、頂上の先の沢筋に実在するという坑口探査の冒険もした。そんな山行に魅力を感じてもらえたようで、今年も参加者の中から日本山岳会への入会申込み者が現われたのはうれ

しい限りである。

1人で計画する個人山行はともかく、支部というのは誘い合っただと山に行くことで成り立つものだと思う。新型コロナウイルス感染症の状況を考慮して、山行を実施して良いかどうかを見極める。様々な登山を考え、試行錯誤を続けた1年であった。

(支部長・阿部陽子)



スズラン

## 『山岳』第116年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十六年(2021年)の発刊は、本年7月中旬を予定しております。原稿の締め切りは4月中旬となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

[送り先] 〒145-0064 大田区上池台1-35-5 神長幹雄

TEL 03-3720-7569 E-mail kaminaga@ruby.dti.ne.jp

(『山岳』編集委員会)

## 山形支部

唯一歩くことができた  
高館山

2020年度の山形支部事業は、新型コロナウイルスの影響で軒並み中止としてきたが、晩餐会については3密回避を実現できる開催方式として、日帰りの昼食会として開催することとなった。

場所は、鶴岡市大山地区の高館山(273m)から八森山への稜線散歩。昼食会は大山公園の古峰神社・直会殿で行なった。

山行は大山公園駐車場に集合、9時出発。下池を反時計回りに回り、高倉山コースから登山。山頂からは八森山への稜線を散歩して、大山公園に戻るコースを歩いた。天候は曇りときどき雨だったが、紅葉の間から日本海や庄内平野を眺めることができた。参加者は木村喜代志、梅本幸巳、鈴木理夫、野堀嘉裕、河口昭俊、佐藤一広、日向稔也の7名。

昼食会は大山公園の古峰神社・直会殿で行なったが、この会場は大山神社宮司で、支部役員、財務担当の梅本幸巳氏のご厚意によって利用させていただくことができた。



高館山の頂上東屋にて

梅本会員に深く感謝申し上げます。弁当と鍋料理による昼食会では会員の近況報告や山行の経過が披露され、楽しいひとときを過ごすことができた。(野堀嘉裕)

## 茨城支部

## コロナ禍の中での活動

昨年は、新型コロナウイルス感染の流行が世界的に大問題となり、すべての人々に健康、日常生活、経済の面で大きな影響を与えた。茨城支部の活動も例外ではなく、相当な制約を受け、支部主催の山行は計画できず、ほかの行事も催行できない事態が続いた。そのような

## 北島英明氏の遭難について

日本山岳会会員の北島英明氏(61歳、東京多摩支部事務局長)が、昨年12月30日に南アルプス・赤石岳から樫島へ下山の途中、標高2900m付近で荒天などのために遭難し、警察へ救助要請の連絡がありました。

ただちに静岡県警と消防署、民間組織マウンテンワークスによって救助活動が行なわれました。しかし、現場は雪崩と滑落の危険の高い急斜面で近寄るこ

とができず、また、乱気流と強風のためにヘリコプターによる救出もできませんでした。なお、31日の夕刻から本人との連絡は取れていません。以上の経過から、5日に救助活動は打ち切られ、捜索再開は雪解け後になる可能性があります。

北島氏は山岳遭難救助活動に活躍中で、執筆や講演も多く、著書もあります。  
(東京多摩支部・遭難対策本部 本部長 野口いづみ)

なかで、1月11日には講演会・例会を行ない、茨城県山岳連盟海外登山委員長・椎名正明氏ほかの講演「ギアナ高地への登山」、「スペインへの登山」があった。

2月15・16日には、恒例の第13回4支部合同懇談会(群馬、栃木、千葉、茨城をつくば市で開催した。今年は茨城支部の当番で、講演会と各支部の活動報告、記念山行を行なった。講演は、支部友・奥井登美子氏による「霞ヶ浦と筑波山の環境問題に取り組んで」と栃木支部長・渡邊雄二氏による「赤道直下の氷河の山―日本・エクアドル友好合同登山隊2019」、記念

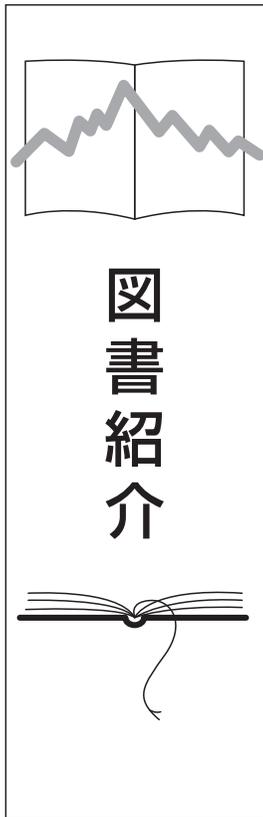
山行は、宝篋山(461m)登山と小田城址・平沢官衙見学であった。4月以降は、講演会・例会を9月11日と11月16日に開催し、それぞれ長岡正利会員による「ヒマラヤの測量地図作成小史とその山の高さ―附・測量地図・作成の基礎知識と(山の標高)とは」、産業技術総合研究所・宍倉正展氏による「チバニアン」の時代と地球の変動」が行なわれた。通常これら講演会は一般に公開しているが、コロナ禍のため会員のみ非公開となったことは残念である。

6月13日には、令和2年度の総会を開催し、令和2年度の事業計

画予算を審議し、決議した。その後、九州大学名誉教授・真木太一氏による「75歳・心臓身障者の日本百名山・百高山単独行」と題する講演も行なわれた。また、8月10日には、「山の日」記念の筑波山登山を会員有志で行ない、筑波山頂「仲の茶屋」で懇親を深めた。コロナ禍の中、以上の活動を行なったが、いずれも参加者は多く

なく、例会後の懇親会も休止したため会員相互の親睦を深めることは難しく、誠に残念なことであった。ほかの支部におかれても同様の状況が生じているのではないかと懸念されるが、1日も早くコロナウイルスの蔓延が終息し、支部活動が旧に復することを祈る次第である。

(事務局長 星埜由尚)



## ヒマラヤ縦走―「鉄の時代」のヒマラヤ登山

鹿野勝彦著



2020年6月  
本の泉社製 425頁  
A5判上製 3500円+税

縦走と聞いて心躍らない登山者はいないだろう。それをヒマラヤで行なうとはいかなるものなのか。

本書は世界に先駆けて、極地法によるヒマラヤでの縦走という登山の形を切り拓いた著者が、自らのヒマラヤ登山の軌跡とそのときどきのヒマラヤ登山を取り巻く状況や著者の考えを克明に記したものである。時代は1960年代末以降の「ヒマラヤ登山の鉄の時代」で、著者が隊長や登攀隊長、隊長として参加したキンヤン・キッシュ(65年)、2度のチョモランマ(70年、73年)、チューレン・ヒマール縦走(71

年)、ナンダ・デヴィ縦走(76年)、カシエンジュンガ縦走(84年)という約20年間の6登山が扱われる。公式報告書に載らなかつた箇に衣着せぬ批評と詳細な記録はそれ自体に価値があるが、本書の核心は各登山の総括とそこから弁証法的に生まれたヒマラヤ縦走登山論である。刮目すべきは、極地法によるヒマラヤ縦走とは、私たちが想像しがちな「兵隊の山登り」とは異質なことだ。ヒマラヤの縦走では、縦走隊の下山ルートを確認しサポーターする態勢が欠かせない。ルートは2〜3に分かれ、キャンプも10〜11ヶ所に上るなか、BCに留まる隊長が隊員の日々の行動と荷揚げを管理し指示するという極地法のやり方は通用しない。その代わり、隊員すべてが目的や情報を共有した上で、それに基づいて一人一人が現場で自ら判断し意思決定して行動するだけの能力、自覚、責任感を具えていることが求められる。幸い当時は、BCまでの輸送やサポーター隊を任せ得る大学山岳部OBと、縦走隊を務める社会人山岳会の先鋭的なクライマーがそろい、両者を融合させた隊をつくることができた。高所

縦走という課題の困難さとサポートの必要性が、役割を分化させ、個々人がそれぞれの能力を発揮する場が生じたのである。

こうした隊における隊長の役割は、シエルパなど日本人以外の隊員を含む全員に、各キャンプの状況や情報を共有させることであり、それ以外にあるとすれば、計画の断念や撤収の指示だけだということ。加えて隊長に求められることは「目標に関しては絶対にはぶれない」ことだと喝破する。

現在のヒマラヤ登山はますます多様化が進み、著者が経験したような大掛かりな登山が行なわれる可能性は低い。だが、登山の形態が変わるうとも、自律した個人の現場での判断の重要性やシエルパとの関係のあり方など、ヒマラヤ登山を目指す人が本書から得られることは多い。著者は登山者として、また文化人類学者としてヒマラヤに関わってきたが、前者の総括が本書であり、後者のシエルパ社会研究の集大成が『シエルパヒマラヤ高地民族の20世紀』（茗溪堂、2001年）である。この双耳峰のような2つの著書を併せ読む（縦走する）ことで、広義のヒマラ

ヤ理解がより深化することは疑いようがない。

本書を読んで思い出したことがある。登山前のカンチエンジュンガ隊が集うカトマンズのVanavanレストランに著者を訪ね「鹿野先生」と声を掛けたとき、「おい、先生だつてよ」と言つて笑つていた隊員たちの姿だ。人によつて呼び捨てだったり、敬称が付いていたり、著者にとつての人間関係がそのまま現われる本書は、誠実な「その人間的記録」となつており、組織論としても優れたものである。

（南真木人）

（南真木人）

## 森林の系統生態学



2020年4月  
名古屋大学出版会  
A5判 369頁  
5400円＋税

山を歩いていて、いちばん山が山らしいと感じるのはどういふとき、展望の良い山頂で休んでいるとき、雪山で風のうなりに身を凍らせているとき……。

## 図書受入報告(2020年12月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
日本奥地紀行の旅研究会(編)	ザック担いでイザベラ・バードを辿る : 紀行とエッセイ	176p/22cm	あけび書房	2017	出版社寄贈
山田圭一	プロフェッサー世界を翔ぶ : 山と空に逝った仲間たちに	208p/21cm	クレオ	2020	著者寄贈
打田鉄一	続 藪岩魂 : いつまでもハイグレード・ハイキング	224p/20cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
出川あずさ	雪崩事故事例集 : 日本における雪崩事故30年の実態と特徴	144p/26cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
山と溪谷編集部(編)	日本百名山ルートマップ 2021 (「山と溪谷」2021年1月号 付録)	120p/28cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
河野啓	デス・ゾーン : 栗城史多のエベレスト劇場	343p/120cm	集英社	2020	出版社寄贈
小松由佳	人間の土地へ	255p/20cm	集英社インターナショナル	2020	出版社寄贈
石川直樹	地上に星座をつくる : ヒマラヤ遠征を繰り返し、旅から旅へ	303p/19cm	新潮社	2020	出版社寄贈
成川隆頭 他(編)	リュックサック XV : 早稲田大学山岳部 1920-2020 100周年記念号	344p/21cm	早大山岳部・稲門山岳会	2020	発行者寄贈
竹内洋岳 / 川口稜(構成)	下山の哲学 : 登るために下る	254p/19cm	太郎次郎社エディタス	2020	出版社寄贈
服部文祥	サバイバル家族	247p/20cm	中央公論新社	2020	出版社寄贈
尾上昇	追憶のヒマラヤ : マカルー裏方繁忙録1970	336p/20cm	中部経済新聞社	2020	著者寄贈
砂田定夫	山あれば人あり : 登山史に躍動した人びと(山岳文化叢書 No.10)	252p/21cm	日本山岳文化学会	2020	著者寄贈
遠藤家之進正和(編)	写真でみる高頭祭のあゆみ : 高頭仁兵衛翁寿像碑前祭 2020	84p/21cm	日本山岳会越後支部	2020	発行者寄贈
日本山岳会千葉支部(編)	房総半島郡界尾根踏査報告書	32p/26cm	日本山岳会千葉支部	2020	発行者寄贈
日本山岳会 東九州支部(編)	日本山岳会東九州支部創立60周年記念誌	124p/30cm	日本山岳会東九州支部	2020	発行者寄贈
Ed Douglas (ed.)	The Alpine Journal 2020 (Vol.124)	417p/23cm	The Alpine Club	2020	発行者寄贈

でも、やっぱり深い森の中を歩いているときに、山の中にいる、といちばん強く感じられるのではないだろうか。

森にはいろいろな木や草があり、その中で生活する動物がいる。そのすべてが森を構成し、山を形作っている。その中でも特に木は森の主役だ。そんな森がどのように成り立って、どのように生き続け、どのような未来を迎えるのか。それを研究するのが森林生態学。ただ、森の樹々の生態って、分かっているようで分かっていない。

どうしてかって？  
樹の一生の長さを考えてみよう。森のいちばんの主役である大きな樹々。ブナ、ミズナラ、スギなどはどれもすごい時間を掛けて少しずつ成長し、あれだけの大樹になるのだ。人間の寿命なんて、それに比べたらほんの一瞬だ。

そんな命の短い人間が見ることができるのは、樹々の一生のほんのひとコマでしかない。森が生まれてからどのように変わり、どのようになってきたかなんて、短いスパンで得られた情報から推理して想像するしかないのだ。だから森の研究にはまだまだ分からない

ことがいっぱいあり、新しい発見がある。さらにそれに追い打ちを掛けるように、生物の種に関する考え方がどんどん変わってきている。遺伝子解析による新たな知見によって種の歴史が、分子レベルで明らかにされてきているのだ。

森における生き物の相互作用、森の中で生きる植物の生活空間、種の間での棲み分け、そして、種が分かれていく歴史の中で、それがどのように生態的な適応を果たしてきたか。本書はそれをブナ科の樹木の生態的研究を通して得られた新たな発見や、分子レベルの研究で得られた種の分化に関する知見を通して明らかにしようとしてみている。さらにそういったものが地理的、歴史的に連続性を持つて広がる四次元的な空間であると明らかにしているのだが、普通の読み方をしていたのでは、予備知識のない人にはなんのことやら分からないに違いない。

そこで本書をもっと別の視点から読んでみることをお勧めしたい。山を歩いていると、周りに見える樹々がなぜそこに生えているのか、そして、それぞれの樹種の関係はどうなっているのか。ふとそ

んな疑問を感じることもある。本書の中には、そんなときに感じる疑問や興味に答えを出してくれるような知見がたくさん散りばめられているのだ。ブナの仲間、カエデの仲間、カバノキの仲間など、山でよく見かける樹種相互がどのように棲み分けているのか、それはどうしてそうなっているのかなど。この本を読むだけで、山で感じた疑問が氷解し、なにか森の樹々のことが分かったような気がしてくる。しかも興味を引くよう

な遺伝子解析による最新の種分化の知見もどうかい知ることができると。  
確かに内容は学術書そのものだが、無味乾燥な感じがしないのは興味を持って読むと確実にそれに応えてくれるからに違いない。  
山の樹木に興味を持っている人はもちろん、自然保護や森づくりに関わる人たちも、図書館での立ち読みで良いから、ぜひ一度は手に取ってみてほしい本である。  
(近藤雅幸)



令和2年度第8回(12月度)理事会

議事録

日時 令和2年12月9日(水) 19時

00分〜21時30分

場所 集会所およびオンライン

(Zoom)

【出席者】

- 古野会長、山本・野澤各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・近藤・柏各理

事、石川監事

【欠席者】 坂井副会長、黒川監事

【オブザーバー】 節田会報編集人

【審議事項】

1・登山保険の改善および新設の提案

新規の短期登山保険を2021年4月(想定)に開始することを審議した。(賛成12名、反対なしで承

**会員証の継続発行をご希望の方へ**

有効期限が2021年3月31日の会員証をお持ちの正会員の方で2021年4月1日から有効の会員証をご希望の方は、2021年2月27日(土)までに下記専用口座にお振込みください。  
振込手数料はご負担願います。ご不明な点は事務局までお問合せください。

- ① ゆうちょ銀行から振込む場合  
口座記号・番号 00150 1 696644  
加入者名 日本山岳会会員証発行申請
- ② 他銀行から振込む場合  
金融機関コード 9900  
店番 019 店名 ○一九(ゼロイチキョウ)  
預金種目 当座 口座番号 0696644  
金額 ￥1,000

通信欄必須事項 会員番号、氏名、おところ、「継続」と明記願います。  
2020年度分年会費未納の方は先に年会費をお納め願います。

認)

**【協議事項】**

1・パワハラ防止法について(古野)

労働施策総合推進法に基づく相談窓口を設けることについて協議した。

2・リニア新幹線工事への対応について(飯田)

静岡支部の支援要望と自然保護委員会の意向、および本部での対応

応について協議した。

**【報告事項】**

1・入会希望者8名、準会員入会希望者4名について入会承認を行ったとの報告があった。(古野)

2・寄附金事前申請1件、寄附金1件の受領について報告があった。(古川)

3・支部・委員会への計画書、予算案を依頼したとの報告があった。(古川・永田)

4・登山計画書提出状況について報告があった。(山本)

5・11月28日に開催された博物館連絡会議について報告があった。(清水)

6・1月30日に開催される支部連絡会議について報告があった。(永田)

7・会員名簿の発行について報告があった。(永田)

8・12月12日から開催される「エベレスト登頂50周年」写真展の報告があった。(飯田)

9・山岳古道調査の進捗状況について報告があった。(近藤)

10・チラシによるグッズ販売について報告があった。(永田)

11・北九州支部の20周年行事中止

について報告があった。(永田)  
12・会報「山」12月号の発行について報告があった。(節田)

**ルーム誌 12月**

- 1日 常務理事会
- 2日 山行委員会
- 3日 改革事業推進委員会
- 7日 総務委員会 スケッチクラブ
- 8日 山岳研究所運営委員会 フォトクラブ
- 9日 理事会 休山会
- 11日 図書委員会 山の自然学研究会
- 14日 スキークラブ
- 15日 平日クラブ
- 16日 つくも会 マウンテンカルチャークラブ

- 17日 山遊会
- 18日 会報編集委員会
- 21日 資料映像委員会
- 23日 バックカントリークラブ
- 25日 緑爽会
- 12月来室者 134名

**会員異動**

**物故**

- 二階堂匡一朗(3974) 20・12・24
- 鈴木晃三(10005) 20・11・不明
- 松本 治(11409) 20・12・4
- 大川邦治(11574) 19・2・18
- 退会**
- 山口寿澄(5836) 越後
- 梅田浩生(6358) 東海
- 菅野弘章(7703) 埼玉
- 川口 宗(13904) 福井
- 長門 彰(15185) 東京多摩
- 増田敏夫(16406) 東海

I N F O R M A T I O N

**インフォメーション**



◆第30回「山好きの山の絵展」開催  
アルパインスケッチクラブ  
この絵展は毎年2月に開催して

おり、今年は30回目を迎えます。60人の会員が実際に登り、見た山々を描いた作品、水彩画・油彩画・

版画など約70点とスケッチブック十数点を展示します。毎年、山好きの方のほか多くの方々にご来場いただき、ご好評いただいております。

会期 2月21日(日)～2月27日(土)

10時～18時(初日は11時45分から)最終日は17時

### 新聞記事の配信・配付について

新聞の切り抜きなどをPDFあるいはカメラで撮ったりして、メールやリストをはじめ多人数に配信しているのを見受けられます。また、コピーや印刷物にして配付していることがあります。しかし、これは著作権法に違反しています。

新聞記事や雑誌などの利用については、その著作権者の許諾を得る必要があります。論文などの原稿をはじめ、写真やイラスト、図版なども著作物になります。紙面の記事だけでなく、インターネット上の記事も含まれます。

そのような記事の著作権者は、執筆した個人や、新聞記者が所属する新聞社などです。また、複製権(コピーを取る権利)や公衆送信権(メールやインターネット

で)

会場 Ⅱ JR有楽町駅前・東京交通

会館 2Fギャラリー 千

代田区有楽町2-10-1

TEL 03-3215-7962

入場無料

\*今年「創立30周年記念展」として同会館B1Fエメラルドルーム

ト上で人々に送る権利)は著作権者だけにあり、そのため、コピーを取ったりメールで誰かに送ったりするには、著作権者の許諾を得なければなりません。利用料の支払いが必要になる場合もあります。

この点、「個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において使用することを目的とするときは、次に掲げる場合を除き、その使用する者が複製することができる」(著作権法30条1項柱書)などの例外があります。これは純粋なる個人的な利用や文字どおり「家庭内」に準ずる数人程度の身内での使用に限るとされています。

会員の皆さまにおかれては、著作物の適正な利用に十分ご留意いただきたいと思っております。

(総務担当常務理事・永田弘太郎)

にて同時開催します。

◆第17回東海岳人写真展(2021山と自然のパフォーマンス)

東海支部

2020年3月、コロナ禍で延期した写真展を開催します。

共催 Ⅱ 東海支部、中日新聞社

後援 Ⅱ 愛知県教育委員会、名古屋

市教育委員会、愛知県、名古屋

古屋市、NHK名古屋放送局

期間 Ⅱ 2月2日(火)～7日(日) 9時

30分～18時(最終日は17時

まで)

場所 Ⅱ 名古屋市民ギャラリー栄

(中区役所朝日生命協同ビル8F第9・10展示室 地

下鉄栄駅12番出口から東

へ50m)

### 訂正

会報2020年12月号(907

号)の13ページ、「東西南北」欄の

「播隆上人 槍ヶ岳初登頂日」の執

筆者名、小原茂延様は牛丸工様の

誤りでした。訂正するとともに、お

二方に多大なるご迷惑をお掛けい

たしましたこと、深くお詫び申し

上げます。

(会報編集委員会)

### ◆編集後記◆

●コロナ禍の影響で、正直、会報もネタ不足です。明るい展望のない今、今後のことを考え連載企画「島の山旅への誘い」を立ち上げました。状況が落ち着いたら日常から脱出し、ミニ海外遠征気分を味わってみたいかがたがでしょう。ゆつたりと流れる「島時間」の中で、身も心も深呼吸してみませんか。

●島育ちの私自身、瀬戸内海を除き国内の主な島々をほとんど旅してきました。中でも印象に残っているのは、鹿児島県の薩南諸島です。吐噶喇列島の中の島と諏訪之瀬島では御岳に登り、俊寛僧都が流された薩摩硫黄島では2つの温泉を楽しみました。特に野天の東温泉からの眺めは絶景で、屋久島と東シナ海を目の前にしての一浴は、至福の時間でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 908号

2021年(令和3年)1月20日発行  
発行所 公益社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビューハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 古野 淳  
編集人 節田重節  
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp  
印刷 株式会社 双陽社